

令和元年6月12日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H01912

研究課題名(和文) ポップカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究

研究課題名(英文) Basic Studies for constructing a Pop-culture Aesthetics applied the concept of "the Pop-culture World"

研究代表者

室井 尚 (MUROI, Hisashi)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：50219953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 21,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は5名の研究代表者、分担者を中心とした研究会を複数回開催するとともに、大規模な公開研究集会を年に一回開催し、その成果を報告書にまとめ、webで幅広く公開することによって、一般からもその成果に対する広い関心を集めることができた。また2016年の国際美学会、2017年の国際記号学会においてはラウンドテーブルを組織して、海外の研究者との議論を深めることができた。

これらの研究活動によって新しい理論的な枠組の構築に結びつけることができた。本研究はポピュラー文化に関する美学的アプローチの最先端の成果を挙げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ポップカルチャーをその成り立ちや前提から美学的に研究した事例はなく、本研究は新たな一歩を踏み出すことができたものと言える。毎年行っている公開の研究会でも一般の関心はきわめて高く、学術的な研究とポップカルチャーの愛好者との間を架橋する試みとしても新しく、本研究をさらに推し進めることは社会的意義がきわめて高いと確信している。

今後はさらに外国人研究者との交流を拡大するなど、本研究の成果をさらに前進させていきたいと考えている。

研究成果の概要(英文)： Five researchers held meetings many times and held conference opened to the public each year. We published the result of our research in the form of report book and website. We got so much reactions from other researchers and society. We organize round-table at the Congress of International Association of Aesthetics in Seoul, Korea (2016) and the congress of International Association of Semiotic Studies in Kaunas, Lithuania (2017) and exchanged opinions with foreign researchers.

These research activities have led to the construction of a new theoretical framework. This study achieved a successful step of popular culture studies.

研究分野：人文学

キーワード：美学 芸術学 比較文化 ポップカルチャー 文化研究

## 1. 研究開始当初の背景

近年、美学・芸術学の領域において、マンガ、アニメおよびそれに関わる周辺文化としての同人誌、コミックフェスティバル、コスプレ、TVゲーム、ネットカルチャー、アイドル・カルチャーなどのポップカルチャーに関する理論的関心が高まってきている。本研究は平成 25～27 年度一般基盤研究(A)「ポピュラーカルチャーの美学に関する基盤研究」の成果を受け、作者-作品-受容者という従来の芸術・文学研究の枠組を越えるポップカルチャーにおける特殊な創作=受容共同体(「ポップカルチャー・ワールド」)という新しい文化生産の仕組に焦点を合わせることで、上記基盤研究の成果を継承し、さらに先進的な問題設定の中で、ポップカルチャー研究の最前線を切り拓いていくものである。

21 世紀になってからのポップカルチャーは、これまでとは全く違った次元を獲得し、新しい様相を見せているのではないかと思われる。それは端的に言えば、インターネットに代表される分散的でパーソナルなメディアの出現によって、ポップカルチャーの「場所」が、もはやマスメディアではなく、ネットや各種のイベントや展示会などを含む、より多様で広範なメディア環境の中に移行しつつあるということである。この新しいメディアの広がり、ポップカルチャーの受け手と送り手、あるいは受け手同士のつながりを加速させ、その結果、マスメディアを通過しないで直接受け手と送り手を結びつける新たな創作-作品-受容のコミュニティを作り出す役割を果たすようになった。これを、アートワールドという概念を提唱したアメリカの美学者アーサー・ダントーにならって、「ポップカルチャー・ワールド」(以下「PCW」)と名づけたい。ダントーはある「作品」が「芸術作品」であることを保証する理論的・歴史的審級をアートワールドと呼び、著名な芸術家、批評家、キュレーター、ギャラリスト、コレクター、美術メディアなどがこうした価値を共有する「世界」を構成しているとした。

ここで「PCW」と我々が呼んでいるのは、何よりもインターネットなどで互いに結び付けられた受容者とが複合的に構成する「世界=環境」のことである。これは、従来のアートワールドとは異なり、作者-作品-受容者の固定された枠組を解体し、感性的で非歴史的な上位の審級として働き、個々の制作物を統括する虚構環境として働いている。ファンが単に受動的に制作物を受け入れるだけではなく、それらの生成にエージェント(行為者)として能動的に関わるのである。ポップカルチャーを読み解くためには、一部の「語るに値する作品」だけを抽出し、まるで絵画や文学作品のようにそれらを分析するだけではなく、こうした「PCW」の文脈の中で捉えていかなくてはならない。本研究の研究代表者、分担者はこれまで文化庁の主催する「メディア芸術祭」に審査員や会議企画者として関わってきた。平成9年から続くメディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、マンガ、アニメーションの四つの部門に分けられているが、それぞれの部門がバラバラで、それらを横につなぐ理論的観点がこれまで突き詰められてこなかった。また、それらが「作品」概念を中心とした「展覧会」という形式で開催されることに違和感があっても、その違和感がどこから来るのかは解明されていなかった。たとえば、CD が売れないのにライブで百万人以上を集めるアイドルや、アニメの声優によるライブのチケットが売り切れになる現象や、ほとんど宣伝をしていないのに何百万人のユーザーがいるゲームやアプリの存在の意味などは、従来の研究ではなく、我々の提唱する「PCW」の概念なしには突き止められないのではないかと思われる。

## 2. 研究の目的

- (1) 「PCW」に関する理論研究(基礎概念や枠組みの構築)
- (2) 写真・映像・動画などの視覚文化の「PCW」に関わる研究
- (3) ゲームおよびエンターテインメント産業における「PCW」研究
- (4) ポピュラー音楽・アイドル文化における「PCW」に関する研究
- (5) マンガ、アニメーションにおける「PCW」の研究
- (6) 「PCW」から見た日本のポップカルチャー全般に関する歴史的研究

これらの6つテーマについて研究会、研究集会、国内外での学会での研究発表や討議を通して明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

(1) 研究代表者・分担者の専門に即した個別研究を推進し、研究協力者も招き、年間3回開催の研究会にて研究発表・討議を行う。そのための資料収集、情報交換に各自が国内外への出張および学会参加を行い、相互に意見を交換して研究を推進させるほか、年に1回、公開の研究集会(聴衆を集めるシンポジウム)を開催する。研究集会には代表者、分担者、研究協力者のほか外部からも研究者を招聘し、幅広い意見交換を行うと共に、毎年その成果を冊子および電子書籍にまとめて公表する。また、研究補助者を雇用し、資料整理・研究集会の組織運営、報告書作成などのための業務に当てるほか、必要な事務機器および消耗品、資料等を購入しその管理を委ねる。

(2)上記研究目的に掲げた6つのテーマについて、それぞれ以下のような研究班を組織する。

「PCW」に関する理論研究(基礎概念や枠組みの構築):理論班

写真・映像・動画などの視覚文化の「PCW」に関わる研究:視覚文化班

ゲームおよびエンターテインメント産業における「PCW」に関わる研究:産業班

ポピュラー音楽・アイドル文化における「PCW」に関する研究:音楽班

マンガ、アニメーションにおける「PCW」の研究:マンガ・アニメ班

「PCW」の枠組から見た日本のポップカルチャー全般に関する歴史的研究:歴史班

理論班は、研究代表者室井尚が責任者を努め、研究分担者・吉岡洋と研究協力者・大久保美紀(パリ第八大学講師)をメンバーとして、「PCW」に関する各年度・各研究班からの研究成果を受け、それらをふまえた理論構築を行う。したがって理論班の活動は、主として最終年度となる。視覚文化班は、研究分担者佐藤守弘が責任者を努め、研究協力者であるファビアン・カルパントラ(横浜国立大学講師)をメンバーとして写真・映像・動画を対象とした「PCW」の研究を行う。この分野では石岡『視覚文化「超」講義』(2014)をはじめ豊富な先行研究があり、それらの批判的検討も行う。

産業班は、研究分担者吉田寛が責任者を努め、研究分担者である佐藤守弘、研究分担者である秋庭史典をメンバーとして、ゲームおよびエンターテインメント産業における「PCW」の研究を行う。ここではとりわけ、スマートフォンやソーシャルメディアを現場としたその特性の解明に向かう。大規模データを駆使した統計的研究とは異なる視点から、責任者である吉田が提唱している新たな感性学的アプローチを進めていく。

音楽班は、研究代表者室井尚が責任者を努め、研究協力者である小松正史(京都精華大学教授)研究協力者である安田昌弘(京都精華大学教授)をメンバーとして、ポピュラー音楽とアイドル文化における「PCW」の研究を行う。ポピュラー音楽について「ミュージッキング」(スモール)以降の音楽研究の動向をふまえるのはもちろんである。またここではとりわけ、ローカル・アイドル産業における媒介者の役割等が研究課題となるが、これについては、すでに責任者である室井が、平成25-27年度基盤研究(A)において美学の分野では先駆的と呼べる研究成果を蓄積しており、今後さらにその精度を高めていく。

マンガ・アニメ班は、研究分担者吉岡洋が責任者を努め、研究協力者である吉村和真(京都精華大学教授)須川亜紀子(横浜国立大学准教授)をメンバーとして、マンガ・アニメーションにおける「PCW」の研究を行う。ここでは、コスプレ、コンテンツ・ツーリズム、メディアミックス等々、これまでも多くの研究者が注目してきた研究対象が存在する。

歴史班は、研究分担者秋庭史典が責任者を努め、研究協力者でフランス美術史に精通した島本浣(京都精華大学教授)同じく研究協力者である丸山美佳(ウィーン美術アカデミー博士課程)をメンバーとして、日本の「PCW」とも長年深い関わりを有しているだけでなく、その形成に大きな影響を与えてきた西欧の「PCW」との比較なども考慮しながら、日本の「PCW」の歴史的特性を浮彫りにしていく。

#### 4. 研究成果

##### (1)平成28年度

本基盤研究は28年度に交付の通知を受け、1年目は計画書通りのすべての事業を行うことができた。具体的には、7月にソウルで行われた国際美学会にてラウンドテーブルを組織し、研究代表者・分担者による研究発表を行った。研究会の一環として、9月5日から9日にかけて連続で、京都精華大学の研究分担者・佐藤守弘(視覚文化班)を代表とする5名の講師による連続講演「都市とポピュラー文化」を行い、12月には国際美学会の総括、1月には研究分担者・吉岡洋(理論班)による研究発表を行い、また2月の研究集会に向けての打ち合わせを重ねた。

25年度~27年度にわたって実施した一般基盤研究A「ポピュラーカルチャーの美学構築に関する基盤研究」に引き続き、一般公開の研究集会「ゲームの美学-ゲーム的リアリズム2.0」を2月11日に横浜のヨコハマプラザホテルにて開催。産業班である吉田寛がコーディネーターを務め、約100名の一般参加者を集めた。研究代表者、分担者のほか、特別ゲストとしてゲーム研究者の入江哲朗氏(東京大学博士課程)マーティン・ロート氏(ライプツィヒ大学)築瀬洋平氏(ユニティ・テクノロジーズジャパン)井上明人氏(関西大学/立命館大学)さらに映像出演で、国内外から高い評価を受けるゲームクリエイターの小島秀夫氏(コジマプロダクション)が参加し、約5時間にわたり議論を繰り広げた。研究集会の動画はYoutubeにて全編を公開している。

1年間の総括として研究成果報告書を公刊し、広く社会に向けて成果を発表している。全ページを横浜都市文化ラボ(代表:室井尚)のホームページにて公開している。

##### (2)平成29年度

2年目も計画通りに進めることができた。6月末から7月はじめにリトアニアのカウナス工科大学にて開催された第13回国際記号学会にて我々のラウンドテーブルを組織し、研究代表者・分担者・協力者らによる研究発表を行った。また、研究会の一環として、9月11日から15日にかけて連続で京都精華大学の研究分担者・佐藤守弘(視覚文化班)を代表とする5名の講師による公開の連続講演「都市とポピュラー文化」を開催し、研究者の他、京都精華大学の大学

院生約 20 名による発表を行い、参加者による討議・考察を行った。12 月には京都で研究会を開催し、国際記号学会の総括を行ったほか、1 月には横浜で研究分担者・秋庭史典（歴史班）による研究発表および 2 月に開催した公開の研究集会に向けての打ち合わせを行った。

25 年度～27 年度にわたって実施した一般基盤研究 A「ポピュラーカルチャーの美学構築に関する基盤研究」から継続して開催している一般公開の研究集会、「音とともに生きる - 文化的実践としてのポピュラー音楽」を 2 月 17 日に横浜・関内駅のグランベル横浜ビル大会議室にて開催した。研究分担者・佐藤守弘がコーディネーターを務め、約 100 名の一般参加者・研究者・学生を集めた。研究グループのほかに特別ゲストとして、ブロードキャスターのピーター・バラカン氏、輪島裕介氏（大阪大学）、増田聡氏（大阪市立大学）が参加、また研究協力者として音楽班の安田昌弘（京都精華大学）と研究分担者の秋庭史典がパネリストとしてそれぞれ発表を行ったほか、研究代表者、分担者の全員を加えた討議を行った。4 時間にわたり議論を繰り広げ、その様子のすべてを冊子にまとめ公刊、web 上で公開している。

### （3）平成 30 年度

最終年度も研究実施計画に書いた全ての事業を滞りなく実施することができた。

研究会の一環として、9 月 3 日から 7 日にかけて京都精華大学の研究分担者・佐藤守弘（視覚文化班）を代表として 5 名の講師による公開の連続講演「都市とポピュラー文化」を開催し、研究者の他、京都精華大学の大学院生 12 名による発表を行い、参加者による討議・考察を行った。11 月には京都で研究会を開催し、2 月に開催した公開の研究集会に向けての打ち合わせと来年度のセルビアでの国際美学会ラウンドテーブルの企画会議を行った。

25 年度～27 年度にわたって実施した一般基盤研究 A「ポピュラーカルチャーの美学構築に関する基盤研究」から継続して開催している一般公開の研究集会、「インスタ映えの美学 - 溶解する『写真』と『現実』」を 2 月 24 日に横浜・関内駅のグランベル横浜ビル大会議室にて開催した。研究分担者・佐藤守弘がコーディネーターを務め、約 50 名の一般参加者・研究者・学生を集めた。研究グループのほかに特別ゲストとして、松蔭浩之氏（現代美術家・写真家）を迎え、前川修氏（神戸大学）、増田展大氏（立命館大学）がパネリストとしてそれぞれ発表を行ったほか、研究代表者、分担者の全員を加えた討議を行った。4 時間にわたり発表・議論を繰り広げた様子をレポートにまとめ、年度末の研究成果報告冊子に加え公刊した。また、全ページを横浜都市文化ラボ（代表：室井尚）のホームページにて PDF 版で公開している。

### （4）総括

上記のように、当初の研究計画の大部分を達成することができた。とりわけ、一般公開の研究集会においては、多数の熱心な聴衆を集め活発な議論を取り交わすことができた。

その反面、研究の進展とともにさらに大きな問題が立ち上がってきたことも否めない。とりわけ、メディア環境の変化は単にポップカルチャーばかりではなく、文化や文明の全体における地滑りのような変容をもたらしつつあることがより明確になってきており、そのため研究の焦点を PCW のあり方ばかりではなく、脱マスメディア時代における文化変容というさらに大きな問題設定から捉え直さなくてはならないことがより明瞭になってきたと言える。これは今後における我々の新たな研究テーマとなることだろう。

また、海外の国際学会ではいずれも多くの聴衆を集め、日本のポップカルチャーに対する国際的な関心がきわめて高いことを確認することができた。今後も、国際的な舞台での研究内容の発信が重要となっていくことと思う。国際的な研究ネットワークをさらに充実させていく必要性を感じている。

我々の研究をさらに進展させるためには、1) ポップカルチャーの現場に深く関わる人々、2) メディア環境の変化を原理的な水準で研究している人々、3) 海外のポップカルチャー研究者のすべてとのより緊密なネットワークづくりが不可欠であるように思われる。それとともに、他の（たとえば社会学的な）研究とは異なる、理論的、美学的なアプローチは他には見られないきわめてユニークなものであることを自覚し、さらに我々の研究を推し進めていきたいと考えている。科学研究費助成事業には深く感謝している。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 3 件)

吉岡 洋、アール・ブリュットの芸術哲学、臨床精神医学、査読無、48 巻、2019、pp.325-330  
室井 尚、Semiotics in a Marginal Island -37 Years of Semiotics in Japan and Myself、CROSSINTERMULTITRANS: Proceedings of the 13th World Congress of the International Association for Semiotic Studies (IASS/AIS)、査読有、2018、pp.128-132  
[http://iass-ais.org/wp-content/uploads/2019/01/CrossInterMultiTrans\\_Proceedings.pdf](http://iass-ais.org/wp-content/uploads/2019/01/CrossInterMultiTrans_Proceedings.pdf)

秋庭 史典、Yosakoi Soran as a Site of Re-Localization and Its Relationship to Japanese Pop Culture、CROSSINTERMULTITRANS: Proceedings of the 13th World Congress of the International Association for Semiotic Studies (IASS/AIS)、査読有、2018、pp.653-661  
[http://iass-ais.org/wp-content/uploads/2019/01/CrossInterMultiTrans\\_Proceedings.pdf](http://iass-ais.org/wp-content/uploads/2019/01/CrossInterMultiTrans_Proceedings.pdf)

佐藤 守弘、一九一五年の電気都市—大正大礼とイルミネーション、大正イマジユリイ、査読有、No.13、2018、pp.35-52

吉田 寛、メタゲーム的リアリズム 批評的プラットフォームとしてのデジタルゲーム、ゲノロン、査読無、8巻、2018、pp.76-88

〔学会発表〕(計29件)

吉田 寛、Next Level: Creating Larger Research Units in Game Studies、DiGRA 2018: The 11th Conference of the Digital Games Research Association (トリノ大学) 2018

吉岡 洋、On Nature of the Artificial、Kyoto U-Goldsmiths symposium:Future Mind: Art & Technology in the future、2017

佐藤 守弘、Street Observation Movements in Japanese Popular Culture:Strolling, Observing, Collecting and Categorizing、第13回国際記号学会(カウナス工科大学) 2017

室井 尚、Toward a General Theory for Pop-culture Studies、第20回国際美学会議「美学とマスカルチャー」(ソウル国立大学) 2016

室井 尚、吉岡 洋、秋庭 史典、佐藤 守弘、Round Table: Pop-culture Studies from the viewpoint of Aesthetics、第20回国際美学会議「美学とマスカルチャー」(ソウル国立大学) 2016

〔図書〕(計9件)

室井 尚、吉岡 洋、秋庭 史典、佐藤 守弘、吉田 寛、横浜国立大学、『ポップカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究・研究成果報告書 2016-2018年度』、2019、36

佐藤 守弘、慶應義塾大学出版会、日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて(分担執筆) 2018、450

吉岡 洋、学芸出版社、ソーシャルアート(共著) 2016、299

〔その他〕

第1回研究集会「ゲームの美学」講義記録&報告書

<https://drive.google.com/file/d/0B-kWDaZIKQC3WjBsWGp4UkgxZfk/view>

第2回研究集会「音とともに生きる」講義記録

<https://drive.google.com/file/d/1iV49BlAKqA8IEJqcsb2JiiVdmjVeu8pk/view>

第3回研究集会「インスタ映えの美学」講義記録&報告書

<https://drive.google.com/file/d/18ZsTNY1XwYEj3673zt4I2YrS5gndWZVM/view>

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：吉岡 洋

ローマ字氏名：YOSHIOKA, Hiroshi

所属研究機関名：京都大学

部局名：こころの未来研究センター

職名：特定教授

研究者番号：70230688

研究分担者氏名：佐藤 守弘

ローマ字氏名：SATOW, Morihiro

所属研究機関名：京都精華大学

部局名：デザイン学部

職名：教授

研究者番号：10388176

研究分担者氏名：秋庭 史典

ローマ字氏名：AKIBA, Fuminori

所属研究機関名：名古屋大学

部局名：情報科学研究科

職名：准教授

研究者番号：80252401

研究分担者氏名：吉田 寛

ローマ字氏名：YOSHIDA, Hiroshi

所属研究機関名：立命館大学

部局名：先端総合学術研究科

職名：教授  
研究者番号：40431879

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小松 正史  
ローマ字氏名：KOMATSU, Masafumi

研究協力者氏名：安田 昌弘  
ローマ字氏名：YASUDA, Masahiro

研究協力者氏名：島本 澁  
ローマ字氏名：SHIMAMOTO, Kan

研究協力者氏名：吉村 和真  
ローマ字氏名：YOSHIMURA, Kazuma

研究協力者氏名：須川 亜紀子  
ローマ字氏名：SUGAWA, Akiko

研究協力者氏名：ファビアン・カルパントラ  
ローマ字氏名：CARPENTRAS, Fabien

研究協力者氏名：大久保 美紀  
ローマ字氏名：OKUBO, Miki

研究協力者氏名：丸山 美佳  
ローマ字氏名：MARUYAMA, Mika

研究協力者氏名：入江 哲朗  
ローマ字氏名：IRIE, Tetsuro

研究協力者氏名：マーティン・ロート  
ローマ字氏名：ROTH, Martin

研究協力者氏名：築瀬 洋平  
ローマ字氏名：YANASE, Youhei

研究協力者氏名：井上 明人  
ローマ字氏名：INOUE, Aki to

研究協力者氏名：小島 秀夫  
ローマ字氏名：KOJIMA, Hideo

研究協力者氏名：ピーター・バラカン  
ローマ字氏名：BARAKAN, Peter

研究協力者氏名：輪島 裕介  
ローマ字氏名：WAJIMA, Yusuke

研究協力者氏名：増田 聡  
ローマ字氏名：MASUDA, Satoshi

研究協力者氏名：松蔭 浩之  
ローマ字氏名：MATSUKAGE, Hiroyuki

研究協力者氏名：前川 修  
ローマ字氏名：MAEKAWA, Osamu

研究協力者氏名：増田 展大  
ローマ字氏名：MASUDA, Nobuhiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。